

日本文化人類学会関東地区研究懇談会

特別連続企画

『未知の知をひめた古典』

Meyer Fortes

田中 真砂子

第1回

「今、改めて
フォーテスを読む」

発表者：田中真砂子

コメンテーター：植野弘子
三尾裕子

2004年7月24日(土) 14:00~16:30

(17:00~懇親会)

聖心女子大学3号館(新棟)3階333番教室

「今、改めてフォーテスを読む」：発表者・田中真砂子氏からのメッセージ

関東地区研究懇談会が「未知の知をひめた古典」と題して特別連続企画を組織するという。その趣旨はわかるが、その第1回目としてマイヤー・フォーテスを取り上げるから、話をしると云われ、正直驚いた。私の率直な反応は第一になんで今フォーテスなのか、そして第二にフォーテスについて話すのがなんで私なのかということだった。

今日人類学の議論でフォーテスが引用されることは、残念ながら、ほとんどない。その残念なところを、あらためて問題にせよということなのだろうか。それに私はアフリカニストではないし、イギリスに留学したわけでもないから、フォーテスを評価・紹介する適任者ではない。そんなことをごちゃごちゃ並べて断ろうとしたが、運営委員会からの鬼気迫る説得の前に、結局根負けしてお引き受けすることになった。

じゃあなぜ引き受けたのだと云われれば、私はフォーテスに学恩を感じているから、としか云いようがない。彼の理論や、ほんのわずかであれ、彼と直接交渉がなかったら、一生人類学を続けるほどこの学問に魅力を感じたかどうか分からない。続けたとしても、今ある自分とはかなり違ったタイプの人類学者になっていただろうと思う。そうゆうわけで私がお話できるのは学説史を広く、深くふまえた上での客観的なフォーテス評価というよりは、60年代アメリカの大学院で人類学に出会った日本人の極めてパーソナルなフォーテス論であることをお断りしておく。

Meyer Fortes (1906-1983) は南アフリカ生まれ(ユダヤ系移民)のイギリス社会人類学者である。ケープタウン大学で英文学・心理学の修士課程を修了した後渡英し、マリノフスキー、セリグマンらの下で社会人類学を学んだ。マリノフスキーらが組織したアフリカ総合調査プロジェクトの一員として、当時英領植民地であった黄金海岸の内陸サバンナに居住するタレンシ族の調査に1934年より従事した。この調査の成果は初期の2大名著 *The Dynamics of Clanship Among the Tallensi* (副題略、1945) と *The Web of Kinship Among the Tallensi* (副題略、1949)、その他多くの単著論文として発表されている。

その後長らくケンブリッジ大学人類学科の主任を務めたフォーテスは、ほとんど同時期オックスフォード大学人類学科主任であったエヴァンズ=プリチャードと並び、マリノフスキー、ラドクリフ=ブラウンに次ぐ第二世代の社会人類学者の双璧と目された。その影響力は(少なくとも1980年頃までのイギリス社会人類学界においては)絶大であった。

フォーテスの業績のほとんどは直接的にはタレンシ族の社会構造、親族組織、そして宗教に関わるもので、彼自身の言葉を借りれば「ほとんど笑止と云っていいくらい狭い領域に限定されている」。にもかかわらず社会人類学史上フォーテスが重要なのは、多くの優秀な後進を育て、研究を組織し、理論的枠組みを用意することができたからに他ならないが、それが可能であったのは、彼の教師としての力量もさることながら、それに説得力を与えたタレンシ研究の質の高さにあるだろう。洞察力と共感力を兼ね備えたフォーテスは、基本的に構造機能主義の枠組みの中に自らを置きながら、入念に社会的・文化的脈絡をわけようと試み、社会的存在であると同時に文化的存在でもある個人としてのタレンシたちの姿を私たちに垣間見させてくれようとした。院生として初めてフォーテスの論文と格闘した日から40年、今改めてフォーテスの偉大さを感じるの、彼のフィールドワーカー・エスノグラファーとしての力であり、教師力であったか、と私は思う。

時間も限られているので今回は祖先崇拜をめぐる彼の議論(田中編・訳『祖先崇拜の論理』所収)を中心に、私のフォーテス論を展開したい。

発表者・田中真砂子氏の自己紹介

1933年横浜生まれ。学部では教養学科ドイツ科に所属、卒論はフランツ・カフカであった。今思えば当時から社会・個人・神（そして救い）の関係、そしてその問題と個々人がどう格闘するのか、またそこに親子（カフカの場合は父と子）の関係はどう関わってくるのかに関心があった。渡米後遅まきながら文化人類学存在に気づき、ロチェスター大学大学院で人類学を始めたのは1966年である。フィールドは沖縄を含む日本。1960-75年渡米。名城大学短期大学部を経てお茶の水女子大学、同大学院（1985-98）、京都文教大学、同大学院（1998-2002）で文化人類学担当。主な業績は以下の通り。

- 1974 *Kinship and Descent in an Okinawan Village*, Unpublished Ph.D. Dissertation, University of Rochester（後に名城大学『名城商学』32巻4号から33巻3号に5部に分け加筆、採録、1983-84）
- 1976 「沖縄の親族関係語彙」『民族学研究』41巻3号
- 1982 「出自と親族」渡邊欣雄編『親族の社会人類学』至文堂
- 1993 「共同体・家・個人 - 三重県菅島の二つの墓をめぐる - 」藤井正雄他編『家族と墓』早稲田大学出版部
- 主な訳書** 1980 ファン・パール著『互酬性と女性の地位』弘文堂
1980 田中真砂子編・訳、フォーテス著『祖先崇拜の論理』ペリかん社

< 第1回研究懇談会

「今、改めてフォーテスを読む」の御案内>

日時：2004年7月24日（土）

14:00~16:30

会場：聖心女子大学3号館（新棟）3F 333教室

- 研究懇談会終了後、17:00より、田中先生を囲んでの懇親会を予定しています。

< 第2回目以降の予定

（取り上げる人類学者、発表者 決定分）>

今年度

- **第2回（11月頃）ミード**
発表者：山本真鳥
コメンテーター：栗田博之、馬場淳
- **第3回（1月頃）ブラウン and after**
発表者：永田脩一
コメンテーター：青柳真智子

来年度

- **第4回 ニーダム** 発表者：吉岡政徳
- **第5回 シュナイダー** 発表者：小川正恭



< 問い合わせ先 >

日本文化人類学会関東地区研究懇談会運営委員会事務局
〒150-8938 東京都渋谷区広尾4-3-1
聖心女子大学人間関係研究室 葛野浩昭

TEL 03-3407-5743 FAX 03-3407-5833

関東地区研究懇談会・特別連続企画 - 未知の知をひめた古典

たとえば、誰もまだ発見していないフロベニウスの思惟、誰も見出して来なかったラドクリフ=ブラウンの思索とは、今日いかなる読みの博搜をつうじて垣間見えてくる「フロベニウス」や「ラドクリフ=ブラウン」の姿であり、その著作群であることだろうか。

西暦二〇〇四年のフィールドワーカーとして、人類学の古典と呼ばれるテキストにあらためて真向かうこと。さりとしてここでは、先人の「帝国主義的な」業績の功罪をまたしても現在の高みから、いいかえればポストコロニアルの光学により浮薄に評定する読みなど、むろんわれわれは期待していない。

一九八〇年代以降のモダニティ批判は、なるほど文化人類学/社会人類学の今日にとり避けて通りえぬ里程標のひとつだったかもしれぬ。古典の読みを介した未知の知の発見、未生の思考にむけた跳躍に、ややもすればそれが阻みかねない不自由を、今日の私たちはようやく漠然と気づきはじめているのである。

人文・社会科学系の領域で、学問の古典とそのアクチュアリティとが今日これほどまでにみごとに乖離を来してしまっている分野、それこそ文化人類学なのではなからうか。

古典への接近を今さらながらに呼びかける本企画で問うのは、それゆえ在りし日の学問への懐旧でもなければ、旧説をめぐる硬直した弁明でもない。ましてやりアリズムの行間に隠蔽された「コロニアル」の余白探しや、「民族誌論」の格好の餌食になりうるような事例のあげつらいでもない。

古典は、糾弾によってでも恩情によってでもなく、まさに生きた同時代の書物として再読されねばならない。単なる「過去の書物」と古典とを分かち唯一の指標とは、おそらく後者の非回収性に求められるからだ。知られるように、たとえレヴィ=ブリュルがエヴァンズ=プリチャードに、フォーテスがリーチに徹底批判されたとしても、批判された当の著作をひとがなお執拗に古典と呼びつづけるのは、型どおりの批判によってはそれらを忘却し抹殺しきれぬ知、既存の知では回収不能な未知の知の存在を、ひとが少なからぬ不安や畏れとともに直観しているからである。

人類学的古典の数々にひそむ尋常ならざるフィールド・データの厚みや、おなじく尋常ならざる感性と思考の広がり、原典を素通りした教科書的批判や、原点批判者の批判の受け売りではけっして感知されうものではない。

かかる趣旨のもと、本企画では、人類学的古典とその著者の学問的営為に長年にわたり対峙し、当の古典にみなぎる思考の全容を知悉する点にかけては余人をもって代えがたい方々に毎回ご報告をいただき、各古典の生産者が尋常ならざるフィールドワーカーとして、あるいは尋常ならざる思惟の達人として、今日の私たちに問いかけずにはいない「未知の知」のありようを探っていくことにしたい。

「古典に還れ」と抹香臭く叫ぶのではなく、ともに「古典に突き進もう」ではないか。

企画:日本文化人類学会関東地区研究懇談会運営委員会

渡邊欣雄・大杉高司・葛野浩昭・真島一郎